Re:2人で始める素晴らしくも険しい異世界生活に祝福を！

キリンビールR

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

このすばの主人公カズマさんがリゼロの世界に転移してスバルくんたちの手助けをする話

文章力もなく、ストーリーも無茶苦茶かもしれませんがどうかよろしくお願いします。あと独自解釈やオリジナル設定が入るかもしれません。

※最初以降このすばのキャラはカスマさん以外ださないつもりです

目　次

プロローグ ―――――――――――――― 1
第1話　この2度目の異世界に邂逅を！ ―――――――― 7
第2話　この心優しい少女に救済を！ ―――――――――― 12

プロローグ

俺は今どこかも分からない街中にいた。
何故こうなったのか、理由は分かっていてもあまりに理不尽な出来事に取り敢えず叫びたかった。
「こんのクソったりゃあぁァァァァ!!」

時は数時間前に遡る。
今日も昼まで惰眠を貪り、ダラダラし、飲みに行くという平穏な日常を送るつもりだった。
だが、そんな俺の素敵で平和な日常は、朝早くに壊された
「クエストを受けに行くぞ!」
「何だまた藪から棒に」
「何だとは何だ。本来冒険者とは、街周辺のモンスターを倒し、治安維持を行うべき職なのだ。それがお前ときたら!金があるからと毎日のようにダラダラダラダラ!」
これもまだ日常の範囲内だった。こうやってダクネスが俺をクエストに行かせようとして、それを俺が断ろうとちょっとした戦いになるのは最近じゃよくあることだ。ちなみに今のところは全戦全勝の負けなしだ
「だから何度も言ってるだろう?俺はもう危ない事をせず、弱いなりに安全な場所でブルジョアで優雅な生活を送るって」
「なにが弱いだ、いつもは魔王軍の幹部を倒したと自慢し回っているくせに、いいからさっさと起きろ!」
こいつも学習しないやつだ。ダクネスが布団を俺から取り上げようとしてくるので、そっと首筋に手を伸ばし
「『フリーズ』」
「ひゃうぅぅぅん!!」
「プークスクス、ララティーナお嬢様ってば「ひゃうぅぅぅん!!」ってば可愛い声出してちゃってー、可愛いですよーララティーナお嬢様ー」

「貴様ァ、ブッ殺してやる！」
「ぐえっ、この、お前力ずくとか卑怯だぞ！自分より弱いものを力で抑えつけて、貴族として恥ずかしくないのか！」
「何を今更！普段からお前なんか簡単に倒せるとか言っているのはどの口だ！」
　ダクネスが力ずくで組み伏せようとしてくるため、俺はいつもの如くダクネスの手を掴み
「くっそ、『ドレインタッチ』！」
「ッ！ーーフッ、もう体力を吸われるのには慣れた！吸われきるより先にお前を組み伏せてやる！」
　無駄に変な耐性つけやがってこのやろう、そんな耐性つける前に攻撃スキルの１つでも取れってんだ！
「な、ぐえっ、悪かった、俺が悪かったから、すみませんでした！許してくださいラティーナお嬢様ァ！」
「ふぅ、やっとその気になったか！ならさっさとベッドから出て着替えろ」
　ふっ、だからお前はいつまでたってもチョロネスなんだよ！俺は着替えを取りに立ったフリをして特注のミスリル製のワイヤーを手に取り
「誰がいつ行くっていった？『バインド』！」
「な、まだ抵抗するつもりか！この男は！」
「はっ、あまいな、この程度で俺が諦めるとでも思ったのか？」
「っ、……なぁ、そんなにクエストを受けるのが嫌なのか？」
「な、なんだよ、そんな目で見たって俺は行かねぇぞ！」
　どうせ演技だろ？その手には引っかからねぇぞ！
「……そうか、そうだな、悪かった…」
「っ、やけに物分りがいいじゃねぇか」
　バインドで縛られたまま戻っていくダクネスの姿は少々おかしかったが、寂しそうに見えた。
　なんだよ、俺が悪いのか？俺が悪いってのか!?
　……うん、客観的にみたら悪者は俺だ。なかなかにクズだ

な、俺。
くそっ、コイツわかってやってやがんのか？
あー、もう
「しょうがねぇなぁ！」
「行く気になったか！」
やっぱりこいつはわざとやっている気がする。まあ釈然としないけどしょうがない。たまには体を動かして終える1日も悪くないしな。いってやるか
と、そんなこんなで外に出た俺達だが、少し用事があったため少しウィズの店に寄らせてもらった。
ウィズの店に入ると
「いらっしゃいませ！普段は男女平等を掲げ悪態をつくが女の涙を見ると折れてしまう小心者の男よ！」
「べ、別に折れてなんかねぇし?!」
扉を開けた途端いつもの用に、人を真っ向から煽りにきては、その時に生み出される悪感情を美味とする悪魔、バニルが接客してきた。
何か、いつもより店が狭く感じるような…
いや、明らかに狭い。つーか
「何だこれ」
そこには、店の天井まで届きそうな程大きな、某ネコ型ロボットがポケットから出しそうなピンク色のドア、のようなものがあった。
「いらっしゃいませ。あ、それはですねカズマさん、なんと、異世界に行けるという扉です！」
「異世界？とはなんですか？」
「異世界と言うのはですね…」
めぐみんと一緒に、アクアとダクネスも興味を示しだしてウィズに色々と聞き始めた
「異世界って、ほんとにそんなことが可能なのか？」
「ふむ、確かに稼働しているところを見たことがなければ、誰かが扉を開けたところを見たことがあるわけでもない。だが説明書にはこう書いてある。どこでも異世界ドア。使い方は簡単行きたい異世界を

想像して扉を開けるだけ、とな」
「説明書なんてあるのかよ、第一行きたい異世界を想像って、そんなん、異世界を知っているやつしか使えないじゃないか」
「そうだな、だからこそ製作が可能だった、と言えるのかもしれんな。あのポンコツ店主が言うには、あれは神器によって産みだされ、また、あれ自身神器クラスの魔道具なのだとな。聖なる力を帯びているためこの吾輩にも見通せぬのだが。可能性が無いとは言い切れん。異世界に行ける扉、という胡散臭いものを持ってきたときは、また焦げ店主にしてやろうかとも思ったが、本当に神器によって産みだされたものなのだとしたら、もしかしたらもしかするかもしれぬぞ、デメ《・》リ《・》ッ《・》ト《・》も確認されておらぬしな」
「ほう、て言うことはあれか、これがあれば我が安住の地、日本に⁉」
「そうはやるでない。我輩は可能性が無いわけではないと言っただけだ。どうやっても稼働せず、扉を通ったところで何も変化はなく、ただの扉でした、というオチもあれば、稼働はしたが十全に機能が発動されず、運悪く空間の狭間に落ち、そこで永劫の時を過ごすことになることだってあり得よう」
「う、使うにはリスクが高すぎるか。というか、こんなものどこで見つけてきたんだ？」
「それはですね、紅魔の里で譲り受けたんですよ」
「紅魔の里に？前行ったときはそんなもの聞かなかったけどな」
「はい、私も里にそのような物があるとは一度も聞いたことがありません」
「以前、シルビアさんが紅魔の里に攻めいったときがありましたよね？その際に封印を解かれた謎施設の中にあったようでして。いつも贔屓にして頂いてる魔道具職人の方の、家の壊れた扉と取り替えてみたらしいんです。ですが押しても引いても開かないので外そうとしたところ、そこで説明書が見つかり、凄そうなので私に譲ってくださると」
　つまりゴミを押し付けられただけでは？
「だがしかし、いつもなら開かずの扉なんて喜びそうなものなのにな。

あそこの連中」
「里の皆さんは開けようと試したあとだったようです。商業効果も見込めなさそうと言っていましたから」
　試してはいるんだな…。まあ確かに、この世界の住人に異世界、なんて言ってもさっきのめぐみんたちのような反応が返ってきて終わるだろう。ってやっぱりゴミを押し付けられただけじゃねぇか
「カズマさん、カズマさーん、それの説明書なんだけどね？後半の文字は日本語っぽいわよ？」
　まじでか、そういえば紅魔族は例の転生者によって造られた一族だったな。その里にあった神器製の魔道具だ、この扉もあいつが造ったものであるのが道理だな
「どれ、見せてみろ」
　その内容は、前に見た書記のように、製作中を記録したようなものだった。そしてその文面を見て確信した。やはりあいつだ。内容は省くが
　要約するとこうだ
・魔力を流しながら行きたい異世界を想像し、ノブを回せば扉は開く
・異世界への転移は天界の規制だかなんだかで失敗に終わった
　使い方はさっき聞いた通りだが。失敗したことは日本語でしか書いてないようだ。
「ふーん、魔力を流しながら想像すればいいのね？」
「アクアは異世界というものを知っているのですか？」
「もちろんよ。なんてったって私は女神なんだからね。女神からすれば余裕よ、余裕」
　こいつさては説明書の最初の方だけを読んで理解した気になってすぐ動かそうとするタイプだな？まずい、止めなければ。こいつがこういうことをするときは大抵いい事にならん！
「馬鹿、お前やめろ、それは使えねぇんだよ無理に使おうとすんな！またやっかい事起こす気か！」
「ふふん、カズマってばそうやってまた独り占めする気ね？そうはさ

せないわ！先に日本に行くのは私なんだから！そこでアクシズ教を広めて私を敬い崇めてもらうんだから！」
「あ、ズルいですよ！２人だけ異世界に行こうとして！こうなったら私も最高の異世界を想像して先に！」
異世界を想像って、めぐみんのやつなんか勘違いしてないか!?
「ば、お前らほんとにやめろ！ドアを開こうとすんな！魔力も流すな！」
アクアとめぐみんが魔力を流し開こうとノブを掴み引こうとする。
なんとしても阻止する！そう思いを決めドアを思いきり押すと

開いた、開いてしまった
「押戸かよぉぉぉ！」

そして今に至る。

第1話　この2度目の異世界に邂逅を！

「こんのクソったりゃあぁアァァ‼」
叫んだ途端に大量の視線を感じた。
そりゃあいきなり街中で奇声を発していたら、誰だって注目するだろう。だがしかしそんなことも気にならないほどに叫びたい気分だったのだ。
取り敢えず歩こう、視線が痛い。

それにしてもここはどこなんだ？本当に異世界？
だとしたらどうすればいいんだおい、やっぱりろくな事にならなかったじゃねぇかあの駄女神め！何としてでも帰って泣かせてやる。
そもそも天界の規制とやらはどうしたんだ⁉失敗に終わったんじゃなかったのかよ！
何はともあれ、何かしらしなきゃな。このままじっとしてれば助けが来るかもしれないが、そんな希望を持てるほど異世界が甘くないのは知っている。
何かあった時の為にいくらか金は持っているが、使えるだろうか。ここが本当に異世界なのかも分からないんだしな。そうだ、テレポートしただけに違いない。規制だってあるんだしな。
取り敢えず、金が使えるか手頃な店で試すしかないだろう。
考えているところに八百屋のような店が目にとまった、よし、ここで試してみるか。
「なあ、おっさん。ちょっといいか？」
「いらっしゃい、何をお求めで？」
なんか見たこと無い野菜のようなものもいくつかあるな。まあ、この赤い果物は普通のリンゴだろう、飛んだりしないよな？
「このリンゴはこれで買えるか？」
そういいながら手の中の２００エリスを見せた。
「ん？リンゴ？これはリンガだぜ？それになんだこの硬貨は、見た事ねぇな。残念ながらうちじゃそんな硬貨は扱っちゃいないよ」

「な、まじでか、そこを何とかできないか？」
「無理なもんは無理だ、金がねぇならさっさと行くんだな！ったく、今日はなんでこうも文無しが寄り付くのかね」
　くそっやっぱ使えないか、それにしても見たこと無い？たぶんあの世界はエリス硬貨で統一してるって聞いた気がするけど。ちゃんとダクネスに聞いときゃよかったな。ん？
「今文無しが来たのが1回目じゃないような事言ってたけど、どういう事だ？」
「さっきも来たんだよ、てめぇみてぇな知らねぇ硬貨をもってリンガを買えるか聞いてきた坊主がな。そういやそいつもおめぇ見てぇに黒髪黒目だったな」
「へぇ、黒髪黒目か。そいつがどこに行ったか分かるか？」
　見たことの無い硬貨を持っていて黒髪黒目。ここを異世界とするなら、そいつもこの世界に来た異世界人かもしれないな。ただ珍しい人間が同じ日にここに来たってだけの可能性もあるが、探してみたい気もするな。
「あ？そんなもん知らねぇよ。あっちの方に歩いてったってだけだ。おら、商売の邪魔だ！さっさとどっか行っちまいな」
「そうか、ありがとな、おっちゃん！」
　同じ異世界人なら何か聞けるかもしれん。まだ近くにいたらいいんだが。

　そんなこんなで歩くこと数分、全然見つかんねぇ。
　そりゃそうだ、いくら髪の色が珍しいからって、一人の人間をこの人混みから見つけるなんて、そう簡単なことじゃないしな。
　そんなことを思いながら途方に暮れていると、路地裏にいる４人の人影が目に入った。
　その人影に目を向けると大柄な男、細身の男、そして子供のように小さな男が、一人の人間を前に取り囲んでいるようだった。そういや、アクセルの街じゃダスト以外でチンピラなんて見なかったな。ほんと、治安だけは良かったからな、あそこは。

まあ、お気の毒様ってことで、悪いが俺は危ない橋は渡らない主義なんだ、恨むなよ。と、去ろうとしたとき。絡まれて土下座している男が見えた
「あれ?あいつ」
絡まれているのは黒髪黒目の男だった
やっと見つけた特徴に一致する人間が揉め事起こしてるって…本当に運が良いのか疑いたくなる。
だが、あいつはきっと日本人だろう。理由はそいつの服装にある。そいつが着ていた服は、デザインは違えど俺が持つ唯一の日本の思い出の品。そう、ジャージだった。
助けてみるか、俺もそれなりにレベルの高い冒険者だ、流石に街のチンピラぐらいになら負けはしないだろう。そう思いたい。
こっちの世界でもスキルは使えるのか?試しに、初級の着火魔法を唱えてみた。よし、使えるな。それならと、俺は潜伏スキルを発動させ、チンピラ達の背後に忍び寄り
「ダブル『ドレインタッチ』!」
「「ガァァ!」」
チンピラの3人の内、弱そうなチビを除いた2人の首根っこを掴み魔力と体力を全力で吸い取ってやった。
「うおっ、なんだてめぇ!何しやがった!」
そして、相手が警戒している隙に
「『ドレインタッチ』!」
「ガァァ!」
最後のチビも頭に手を当て、倒れるまでドレインタッチをお見舞してやった。よし、なんとかなったな。やべぇ、今の俺超カッコよくね?
「あんた、大丈夫か?立てるか?」
突然起こった出来事で、目を白黒させている男に、俺は取り敢えず自己紹介をすることにした
「俺の名前は佐藤　和真。あんたは?」
「え?お、俺は、菜「邪魔だ邪魔だ!どいてくれ兄ちゃんたち!」へ?!」

「うおっ?!」
お互いに自己紹介しようとしたところで、いきなり金髪のロリっ娘が俺達の方へ走ってきた。

数分前スバルｓｉｄｅ
その時菜月　昴は後悔していた。
無理無理無理無理無理ィ！刃物は無理だって！敵いっこない！誰か助けてェ！
「ちっ、んだよこの野郎、金になりそうなものなんて全然もってねぇぞ、無駄に手こずらせやがって」
「すいません！靴でもなんでも舐めますから！どうか命は！」
はい、舐めてました！すみません！異世界だから勝てると思ってましたごめんなさいい！
「ダブル『ドレインタッチ』！」
「ガァァ！」
ふと、絡んできた三人とは違う男の声に反応し顔を上げてみたら、二人の男が倒れてきた。
な、なんだ今の、何したんだ？二人の男を倒した？つーかどっから出てきたんだ？それらの突然の出来事に、脳の処理が追いつかないでいると
「『ドレインタッチ』！」
「ガァァ！」
突然現れた男は、最後の1人も触れただけで倒してしまった。
「あんた、大丈夫か？立てるか？」
伸ばされた手を取り立ち上がる。
と、取り敢えずお礼を言わなきゃと思い口を開こうとすると
「俺の名前は佐藤　和真。アンタは？」
「え？お、俺は、菜「邪魔だ邪魔だ！どいてくれ兄ちゃんたち！」へ?!」
「うおっ?!」
未だに整理が追いついてない頭で、聞かれた名前を答えようとすると、突然走ってきた少女によってそれは阻まれた。

「あ?こいつら。あんたら絡まれたのか。見かけによらずそこそこ腕が立つんだな。片方はボロボロだけど…っと、急いでんだった。まあなんだ、強く生きろよ!」
走ってきた少女は、少し立ち止まってそう言うと、またすぐに走っていった。普通の人間とは思えない速さで。なんだったんだ今の…

カズマｓｉｄｅ
あっちでも色々と凄い物は見たけど、この世界ではロリが壁をあんなスピードで登るのか。まあ俺の妹の方が凄いけどな。
「な、何だったんだ今の…。お前の自己紹介の途中だったな。それで、名「そこまでよ、悪党!」」
気を取り直して名前を聞こうとすると、またしても自己紹介は遮られた。凛とした、強い意志を持ったきれいな声によって。あと少しめぐみんに似ている
声の方を向くと、そこには美少女が立っていた。

第2話　この心優しい少女に救済を！

スバルｓｉｄｅ

「そこまでよ！悪党！」

透き通るような声だった、然程大きい声ではないのに、しっかりと芯まで届くような、強い意思の籠った美しい声。

その声の主だと主張するような強い意思を込めた目でこちらを見る少女は、声に違わない美しい少女だった。

その意思が自分への敵意だとしても、見惚れてしまうような美しい少女。

菜月　昴はその時、まるで時が止まっているかのような感覚に陥った。

カズマｓｉｄｅ

な、なんだ？悪党？誰が？俺か？いやいやいや、悪いことなんて俺は何もしてない。なら俺は違うな、うん

チラッ

気絶したチンピラ達

いやいやいやいや、違うからね？あれは正当防衛と言うやつであって何も悪いことではない！だから俺じゃない！

「あなた達よ！盗んだものを返しなさい！」

「違うんだこれは！正当防衛と言うやつで！って、え？このチンピラ達のことについて怒ってたんじゃないの？」

盗んだものってなんだよ、俺こっちの世界では盗みなんて働いてないぞ？

「？そこに倒れてる人達の事は知らないわ、それより盗んだものを返して！あれは大事な物なの！」

「俺じゃないですよ？それ、誰かと間違えてませんか？…はっ、まさか、お前が?!」

「いや、俺も違いますよ?!ものを盗むなんて度胸俺にはないって！」

こいつも違うならやっぱり人違いか何かだろう

「シラを切ろうとしても無駄よ！この路地に入っていくのは見たわ！あなた達が黒幕だって事は全部全てスリっとまるっとお見通しなんだから！」
　どこかで聞いたことあるような決め台詞で可愛らしくこっちを指差す少女
「いや、ほんとに悪いけど俺達じゃないっすよ？」
「そんな訳「いや、どうやらこの人たちの言ってることは本当だよ？リア」へ？嘘？「ホントだよ」ホントに？「うん！」…」
　突然現れた小さな猫のようなものと、そんなやり取りをしながら赤面する少女……な、なんだ、この可愛らしさ、これが、常識のある美少女の破壊力なのか?!
　そんな事を考えながら少女を見ていると
「ご、ごめんなさい！わ、私の、早とちりで！」
「ホントにゴメンねぇ？悪い子じゃないんだ、許してあげて欲しいな、僕からも頼むよぉ」
「いやいや、こんなとこにいた俺達も俺達だしな、特になんかされた訳でもないし気にしなくていいよ、お前も別にいいだろ？」
「ああ、それはいいんだが、猫が喋って飛んでることについてはツッコまないんですか?!」
　何言ってんだコイツ
「いや、なんで俺が何言ってんだコイツみたいな目向けられてんの?!俺がおかしいのか?!そうなのか?!」
「何を今更、猫が喋って飛んだくらいで、俺の世界では火を吹いたり飛んだりして、邪神の半身だった猫だっているんだぞ？」
「「そんな猫いる訳ないだろ（ないよ）（ないわよ）」」
「いや他２人はまだしもお前がそれを否定するか?!」
「あはは、まあその話しは置いといて、紹介が遅れたね、僕はパック、猫じゃなくて精霊さ！」
「「精霊？」」
　精霊、精霊かぁ…その言葉を聞くとあまり思い出したくはない記憶が蘇る

「そう、僕はこの子に使役されている精霊なんだよ！」
「精霊?!精霊って言うとあれだろ？魔法の定番！つまり君は精霊使いか！」
「え、ええ、でも、精霊使いじゃなくて精霊術師と言うのだけどね、そっちのあなたは思ってたより反応が薄い？みたいだけど」
「あ、ああ、精霊って聞くとちょっとトラウマがあってな…」
そう言って自嘲気味に笑う。
精霊って聞くと未だに首のあたりがゾクゾクするな
「ああ、そういうこ、と、か」
ドサッ！
なんかいやな勘違いされた気がする
「って、大丈夫か?!」
「ボロボロじゃない！今治癒魔法をかけるわ！」
そう言いながら少女は手から光を放ち倒れた男にかざした。おお、凄く治りそう、どこかの馬鹿とは段違いの神々しさ
「そっちもなにか急いでるようなのに、優しいんだな」
「これはあくまで勘違いで疑ってしまったことへの謝罪の気持ちよ、だから、気にしないでね？」
少女は、俺達に気負わせないようにするためか、そんな些細な事を理由に治癒を続ける
「それでもさ、ありがとな」
～数分後～
「ん、ぅ」
「お、起きたな、大丈夫か？」
「あ、ああ、もう、大丈夫だ、ありがとう」
「よかった、もう大丈夫なら私は行くわね？改めて言うけど、勘違いで疑ったりしちゃってごめんね」
まだそんな事を言うか
「別にこっちに実害はないし、コイツの怪我も治してくれたんだし、謝ることはないよ」
「ほんとだ、傷が治ってるし痛みも感じねぇ！これをやってくれたの

か？ありがとう！」
「ううん、これは証拠も無いのに疑ってしまった事への謝罪の気持ちなんだから、お互い様なの！」
　ほんとに、優しすぎるだろ
「じゃあ、ほんとにもう行くわね！」
「待ってくれ！大事なものをを盗られたんだろ？なら、俺に手伝わせてくれ」
「これ以上あなた達に迷惑をかける訳にはいかないわ、これは私の問題だから」
　まあ、この子なら、こんなにも優しい子なら、そう言うよなぁ。俺達のせいで時間を取らせちゃったわけだし、助けてあげたい、つーか罪悪感が…でも、それを言ってもさっきと同じような事を言って断ってくるだろうし…
「じゃあ、俺達が勝手に手伝わせてくれ、それなら俺達にも迷惑がかからないんだから、問題ないだろ？」
　おお、確かにそれなら問題ないな、うん。
「ああ、そうだな、それがいい。あくまで、手助けするのは勝手に、だからな！」
「もう、わかりました！じゃあ、それでいいわよ、変わった人たちなのね」
「あははは、彼女もお人好しだけど、君達もなかなかだねぇ」

　こうして、俺達は心優しい少女を助けることになった